



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 8 月 1 9 日 (火)

発行 館長 加藤 智 一

植物の生長を助ける庭の虫と花

庭に咲く花々や育てた野菜が元気に育つ姿を見ると、自然の力の偉大さを感じます。多くの人は、植物の生長に必要なのは水や日光、肥料だと考えますが、実は庭に棲む小さな虫たちも、植物の健やかな成長に欠かせない存在なのです。虫と聞くと、「害虫」を連想してしまいがちですが、庭には植物を守り、育てる「益虫」と呼ばれる仲間たちが数多く存在します。

まず代表的な「益虫」として挙げられるのが、「テントウムシ」です。「テントウムシ」は「アブラムシ」を好んで食べることで知られており、野菜や花に群がる「アブラムシ」の天敵です。「アブラムシ」は植物の汁を吸って弱らせる害虫ですが、「テントウムシ」がいることでその被害を自然に抑えることができます。農業に頼らず、自然のバランスの中で植物を守る「テントウムシ」の存在は、まさに庭の小さな守護者と言えるでしょう。次に注目したいのが、「カブトムシ」や「コガネムシ」の幼虫など、土壌を耕す虫たちです。これらの虫は地中で枯葉や腐敗した植物を分解しながら動き回することで、土を柔らかくし、空気や水の通りを良くします。植物の根は、酸素と水分を必要とするため、土壌の通気性や保水性が重要です。虫たちが土を耕すことで、植物が根を張りやすくなり、健やかに育つ環境が整います。また、「ミツバチ」や「マルハナバチ」などの花粉媒介者も忘れてはいけません。彼らは花から花へと飛び回り、蜜を集める過程で花粉を運びます。この花粉の移動が、植物の受粉を助け、果実や種子の形成につながる。特に果樹や野菜の栽培においては、受粉が収穫量に直結するため、「ミツバチ」の活動は非常に重要です。近年、「ミツバチ」の減少が問題視されていますが、庭に花を植えたり、農薬の使用を控えることで、彼らの住みやすい環境を整えることができます。さらに、「クモ」や「カマキリ」などの捕食性の虫も、庭の生態系において重要な役割を果たしています。これらの虫は、「害虫」を捕食することで植物への被害を抑えてくれます。例えば、「カマキリ」は「イモムシ」や「バッタ」などを捕まえて食べることで、葉を食い荒らす虫の数を減らしてくれます。「クモ」も網を張って飛来する「害虫」を捕らえるため、見た目には反して庭の頼もしい味方です。

このように、庭には植物の生長を助ける多様な虫たちが共存しています。彼らの活動は、目には見えにくいですが、植物の根や葉、花に直接的な影響を与えています。人間が手を加えすぎず、自然の力を信じて庭を育てることで、虫たちとの共生が生まれ、より豊かな庭づくりが可能になります。

また、見逃されがちですが、花々の中にも植物の生長を助けてくれる頼もしい見方がいます。例えば「マリーゴールド」は、見た目の美しさだけでなく、畑に植えることで多くの実用的な利点をもたらす頼もしい植物です。特に有機農業や家庭菜園では「コンパニオンプランツ」として重宝されています。「マリーゴールド」の根から分泌される物質には、土壌中の有害な線虫を抑制する働きがあり、特に野菜の根を食害する線虫に効果的で、「トマト」や「ジャガイモ」などの根菜類の健康を守ってくれます。また、その独特な香りが、「アブラムシ」、「コナジラミ」などの「害虫」を遠ざける効果があり、周囲の作物への被害を軽減してくれます。さらに「マリーゴールド」の花は蜜源として優れており、「ミツバチ」や「チョウ」などの花粉媒介者を引き寄せます。これにより、畑全体の受粉が促進され、果実の収穫量や品質向上につながります。さらに「マリーゴールド」は比較的成長が早く、地表を覆うように広がるため、雑草の発芽や成長を抑える効果がありますし、なによりその鮮やかな黄色やオレンジの花は、畑に彩りを添え、地域の景観美化にもつながります。山形のような四季の移ろいが豊かな地域では、季節の花として親しまれ、農村景観の魅力を高める役割も果たしてくれることでしょう。

